

東村山市の子育て支援の特徴

— 前児童育成計画推進部会 —

社会福祉法人 土の根会理事長

新保 庄三

東村山市にはじめて訪れたのは、六年前（二〇〇三年）の三月。公立保育園の子育て支援についての研修会に呼ばれたのだ。それがきっかけになり、児童育成計画推進部会の会長職を引き受けることになった。それまで新潟県上越市や長野県武石（たけし）村で、行政における子育て施策のアドバイザー的な役割を担ってきたこともあり、縁あつての就任依頼だと受け止めることにしたのだ。前職の行政側での仕事とは異なり、児童育成計画推進部会が市民参加で行われる協議会という位置づけであつたことも引き受けた理由のひとつでした。

東村山市の住人でもない私が、それから六年以上もかわり続け、保育園の運営を引き受け、社会福祉法人まで設立することになろうとは、当時想像もしなかつたことだ。

当時から、この市の子育て支援策については独特の印象を受けていた。

今年、市内にある国立療養所多摩全生園内の資料館ホールで行われた集会に参加したとき、歴代の市長たちの発言のなかに次のような言葉があつた。「東村山は緑を大切にしてきた。東西南北に公園などの大きな緑

地があります」と。

私はこれを聞いて、確かに緑はあるけれど、それは結果的に残っただけで計画して残したのではないのではないかと、強く疑問を持った。保育園の園長として日々東村山で過ごすなかでの感じたことだが、この市は道が狭い。これは必要に応じて農道を広げてきただけで、生活道路の整備が計画的におこなわれなかった結果ではないのかと感じたからである。

実は、これが子育て支援、保育政策においても全く同じことがいえると思うのだ。近隣と比べても、この市は保育や子育て支援について力を入れてきたように見える。保育全般についても障害児保育についても、近年の子育て支援策についても、行政と個々の現場が努力してきた結果、よいものに育ってきているが、しかし、全体を見渡したとき、システムとして十分機能しているとは言いがたいのではないか。たとえば、行政、保育園、私立保育園、幼稚園、NPOやその他の関係機関の連携ができているか、うまくまわっているかといえは疑問が残る。これは私が東村山市と上越市とを比較したときに強く感じるところである。

それらをふまえ、東村山市の子育て支援の特徴について、三つ述べたい。

一つ目は、東村山市は国型の保育園政策をとってき

たということだ。この市には昨年まで、全ての形態による認可保育園が存在していた。数年前の国の規制緩和をきっかけに、公立、社会福祉法人立（いわゆる私立認可園）に加え、都の認証保育園、NPO法人立、さらには株式会社立、個人運営のものまであったのだ。

三多摩の他の自治体の多くは、都の指導に基づく保育園設営が行われてきた。つまり公立保育園、私立認可保育園、認証保育園、認可外保育園という形態だ。ところが東村山の場合はどちらかというと国の流れにそって、認証保育園の設立を積極的にすすめてこなかった。実はこのことが全ての形態の保育園を存在させたことにつながったと思える。善し悪しではなく、これは大きな特徴のひとつである。

二つ目は、公立保育園の職員を含む市職員が所属する労働組合が強い力を持っているということだ。私は基本的に労働条件や労働環境がよいことには賛成だが、それは利用者や子どもたちに還元されるからこそである。しかし東村山市の場合は、そこが十分検証されてきたかというところがわがらみがある。

一例をあげると、学童保育所の運営について、はじめ社会福祉協議会で運営していたものが後に公立化（正職員化）している。これは他の自治体の公立運営から民間委託となっていくケースと逆行している。市長の「わが市は小平市より学童保育に金をかけている」

という部会答弁はその通りだが、しかし実際学童保育所に入れてある子どもの数は小平市より少ないのだ。どこに金がかかっているのかというと人件費だ。人件費に金を投じることが悪いわけではない。しかしなぜ、せっかく正規職員がいるのに八時まで運営しないのか。通常夜七時まで、近年では八時まで預かる認可保育園が現存するのに、小学生になったとたんに六時前までしか預からないという構造に疑問はないのだろうか。これらは市民のニーズに応えているといえるのか。

もう一つの例は、数年前まで児童館が昼休み中閉館されていたことだ。遊びに来ている親子が十二時に閉め出されるとことを聞いたときはショックだった。後に多くの利用者の要求によって改善されたが、体質的なものはどうなのだろうか。

三つ目の特徴は、保育園施設型の子育て支援がすすめられてきたということだ。保育園自体も先駆的に事業を展開してきた歴史があり、また保育園を利用してある保護者たちの運動も盛んで、障害児保育の充実などさまざまな成果をあげてきた。が、一方で施設に通わない親子が声をあげる機会はほとんどなかったし、幼稚園や在宅支援をしている団体等と共に言う運動には広がっていかなかった。

その例を保育展にみることができる。保育展は他市に誇れる東村山の保育の特徴である。長い歴史を持ち、

今も盛んに行われている。はじめは私立保育園の数園でおこなわれてきたが、ここ数年は公立保育園も参加するようになった。近年ではいくつかの認証保育園なども参加し、来館する市民も多い。私が児童育成部会の会長になってから、保育展の役割が大きく変わってきたことを指摘し、保育園だけの紹介ではない、全ての子どもたちを対象にした「子育てフェスタ」への移行を提案してきたが、未だ実現していない。

「賢い市民が豊かな行政マンを育て、豊かな行政マンが賢い市民を育てる」というのが私のテーマでもあり、会長を引き受ける際にも大目標として心に掲げたことではあった。しかし、既存団体の枠を超えた市民全体を巻き込む第三の世代を育てるところまではいかなかった。

とはいえ、決してあきらめたわけではない。児童育成部会でも子育てサークルからの委員参加も実現したし、NPOをはじめ市民活動もさかんになり、市からの委託事業も受けるようになった。芽はたくさん育っている。これらの芽が大きな目的に向かって育ち合っていくことを期待したい。

そして、親が親になるための二十一世紀の新しいシステムづくりを構築し、この東村山から発信してほしいと願っている。